復興への誓い

育った地域 他人任せにはしない

教職員や避難住民から祝福を受ける佐藤巧真君（中央）。地域復興の力になることを誓った＝22日、大槌町赤浜１丁目・赤浜小

大槌中・佐藤君

避難所で卒業式

校長訪れ証書授与

避難所生活を送る大槌町・大槌中3年の佐藤巧真君(15)は22日、卒業の日を迎えた。電気や水道が使えない暮らしを強いられる中、避難所を訪れた小野永喜校長から卒業証書を受け取った。思い出の校舎は津波と火災で壊滅したが、佐藤君は「地震が起きてから今日が一番うれしい」と喜び、一日も早い復興を待ち望んだ。

避難所の赤浜小。校庭に学習机が一つ置かれ、家族や教職員が見守る中、佐藤君は笑顔で卒業証書を掲げた。同日は大槌高の合格も決まり、救援物資を運んでいた人も手を休め祝福の輪に加わる。赤浜地区の卒業生は3人いるが、出席できたのは佐藤君だけだった。

母三恵子さん(45)は「普通の式は望めないが、地域の人に立ち会ってもらってうれしい」と感激の面持ち。担任の佐々木憲子教諭も「久しぶりに教え子の顔を見て安心した。素直に喜べない生徒も多いと思うが、強く生きてほしい」と思いやる。

佐藤君は親戚の家に避難している家族と離れ、避難所に寝泊まりしている。救援物資の搬送にも進んで協力。「自分の住む地域だから他人任せにしていてはいけない。卒業式を挙げてもらい頑張る原動力になった」と責任感を強くする。

地震発生の日、佐藤君は波が引いた後に友人と生存者を捜しに向かった。偶然、自宅近くで津波に巻き込まれた三恵子さんを発見。卒業アルバムが流されたことを悔やむ母に「命の方が大事」と手を引いて助けた。

その時、大槌中は翌日に迫った卒業式の準備を進めていた。2年生が下校した直後、大きな揺れに襲われ、校舎の1階部分が津波にのまれた。体育館の紅白幕や壇上の花、3年生の卒業記念品の天幕もがれきの海に消えた。

教職員は大槌高に避難し、生徒の安否確認に奔走。現在も2人の安否が確認できないが、「子どもたちを励ましたい」と卒業式の挙行を決めた。22日は町内の避難所8カ所を回り、卒業生125人中、連絡のついた78人に卒業証書を手渡した。

小野校長は「この試練を乗り越え、みんな一緒に喜べる日がいつか必ず来る。迷ったり不安があったら迷わず連絡してほしい」と前途に期待していた。

母に仲間に鎮魂の祈り

山田・稲川さん

感謝と決意 墓前で強く

津波で亡くなった母の冥福を祈り、先祖の墓前で静かに手を合わせる稲川美樹子さん＝22日、山田町・龍昌寺

「お母さんを、よろしくお願いします」

22日、山田町後楽町の龍昌寺。同町織笠の看護師稲川美樹子さん(33)は、墓前で静かに手を合わせた。

津波で母鈴木敏子さん(61)を亡くした。23日が火葬。ふと彼岸だったことを思い出し、先祖に報告しようと思った。だが、墓を掃除する間も現実感はない。

稲川さんは子どもを保育園に迎えに行った時、地震に襲われた。3人の子どもを連れて急いで実家に車を走らせると、まだ敏子さんがいた。

一緒に避難しようと促すが、敏子さんは聞かない。「わたしは大丈夫。子どもがいるんだから先に行きなさい」。これまでにないくらい強い口調だった。

敏子さんを置いて高台に逃げて間もなく、街は津波にのみ込まれた。「今思うと、自分が車に乗り込んでいては間に合わないと感じたのかも」

いつも家族のことを一番に考える母だった。本当は助けられたんじゃないか。今も悔しさと自責の念にさいなまれている。

7日には長女萌ちゃん(6)の誕生日を祝ったばかり。小学校入学を控える萌ちゃんに、ランドセルや机はどうしようかと目を細める敏子さんの顔が浮かぶ。

長男孝太朗ちゃん(4)は、いつも敏子さんにべったりのおばあちゃん子。次男拓ちゃんは16日に1歳の誕生日を迎えた。

どれくらい手を合わせただろう。「お母さんが守ってくれたこの子たちを、しっかり育てていきます」。目には少しずつ母の強さが戻っていた。

春の彼岸にも、沿岸部で墓参りに訪れる人はまばらだ。龍昌寺には、遺骨を納める家族も訪れる。見渡すと、地震で倒れた墓石はそのままになっていた。

孤立状態が続いていた千鶏地区で捜索を続ける地元消防団員ら＝17日、宮古市重茂

5日間の孤立 互助で耐える

燃料や食材分け合い

宮古・千鶏

自分たちでやるしかない―。本州最東端に位置する宮古市の重茂半島。5日間孤立状態が続いた千鶏地区では、限られた燃料を住民で分け合い、食事も各家庭から持ち寄った材料で作る。地域が築いてきた互助の輪は、大津波でも引き裂かれていない。

11日の大津波で、同市中心部と山田町とを結ぶ県道重茂半島線が寸断。重茂半島南東部は孤立した。

市消防団第25分団長の中村卓郎さん(55)を本部長に、「災害対策本部」をつくった。「前線基地」でもある本部は、運行中に被災、取り残された路線バス。被災直後は消防無線が機能せず、唯一残された通信手段はバスの無線だった。

けが人がいた。救急車を要請した。しかし、頼みの市役所も大打撃を受けている。断たれた陸路。負傷者を救急搬送できず、数人が命を落とした。

「死なせなくてもいい人を死なせてしまった」。中村さんが悔やむ。「命をつなぐ道」が断たれた代償は、あまりにも大きかった。

15日夕には山田町方面の県道が復旧。孤立状態は、やっと解消された。

限られたガソリンは災害救助用の車へ優先的に供給する。「住民同士の協力で成り立っている」と中村さんは語った。

避難所では、女性や子どもたちが持ち寄った食材で温かいご飯やみそ汁を提供。中野弘子さん(65)は「団体生活で協力し合ってやっている」と、地域の絆で危機に立ち向かっている。

一関へ避難・施設のお年寄り

「生き残った分、しっかり」

大船渡

多くの犠牲者が出た大船渡市三陸町越喜来の特別養護老人ホーム「さんりくの園」で命を取り留めたお年寄りは、一関市などの福祉施設に身を寄せている。家族が暮らす古里から離れた生活だが、温かい食事は励みになる。迫り来る津波を背に必死に救出してくれた職員に感謝し、亡くなった人の冥福を祈り続ける。

さんりくの園では、津波にさらわれたお年寄り40人が死亡、13人が行方不明のままだ。奇跡的に助かった入所者のうち13人は、一関市滝沢の高齢者総合福祉施設「明生園」（熊谷茂園長）に身を寄せた。

地震発生時、入所者はさんりくの園の屋外に全員集められ、職員が無事を確認。その直後に津波が襲った。

職員は入所者の乗る車椅子を押し高台に避難した。同僚の名を叫びながら波にのまれた人、夫の安否を確認できないままケアに当たる職員もいる。

同園施設サービス課の千田富士夫さん(46)は「流された家屋は吹っ飛んでくるようだった」。どの人を助けたか覚えていないほど必死だった。

明生園に移った佐熊英子さん(77)は、地震発生時トイレの手すりにつかまり、身動きが取れずにいたところを救出され、毛布を体に巻かれて車椅子に乗った。「職員さんが上り坂を、息を切らして押してくれた」と感謝する。

「町がどうなったのか見たい」と語るのは柳本ウメヨさん(93)。趣味の俳句を記したノートは流された。心の整理はまだつかないが「大津波尊き命がむしゃらに」と詠んだ。「津波は何もかも持っていった。生き残った分、しっかり生きる心を持たねば」

食事が並ぶと「おわんでご飯が食べられるなんてうれしい」「サバは古里の味だ」と笑顔を見せる。

地震発生時、入所者はさんりくの園の屋外に全員集められ、職員が無事を確認。その直後に津波が襲った。

職員は入所者の乗る車椅子を押し高台に避難した。同僚の名を叫びながら波にのまれた人、夫の安否を確認できないままケアに当たる職員もいる。

同園施設サービス課の千田富士夫さん(46)は「流された家屋は吹っ飛んでくるようだった」。どの人を助けたか覚えていないほど必死だった。

明生園に移った佐熊英子さん(77)は、地震発生時トイレの手すりにつかまり、身動きが取れずにいたところを救出され、毛布を体に巻かれて車椅子に乗った。「職員さんが上り坂を、息を切らして押

身を寄せた施設で新たな生活を送る（左から）佐熊英子さんと柳本ウメヨさん＝一関市・明生園

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。